

## 終了時評価表

<b>1. 案件の概要</b>	
事業名（対象国名）：ネパールにおける網膜疾患診療サービス強化プロジェクト （ネパール連邦民主共和国）	
事業実施団体名：国立大学法人徳島大学	分野：保健・医療-保健
事業実施期間：2016年5月-2019年5月	事業費総額：69,707千円（税込）
対象地域：カトマンズ、ポカラ	ターゲットグループ：眼科医、内科医、眼科助手、ヘルスワーカー、活動エリアに住む網膜疾患患者及び予備群
所管国内機関：四国センター	カウンターパート機関：B. P. Eye Foundation
<p><b>1-1 協力の背景と概要</b></p> <p>近年ネパールにおいても、網膜疾患は13.9%(1981年)から17.0%(2010年)に増加している(The Epidemiology of Blindness in Nepal:2012)。この傾向は、今後さらに加速して悪化すると予想される。ネパールでも糖尿病患者が増加しつつあり、糖尿病網膜症が失明原因として上位になってくる可能性がある。</p> <p>ネパールには約200名の眼科医が従事しているが、網膜疾患に精通する専門医は少ない。同疾患に対する診断治療システムも不十分で、患者に対する適切な治療の提供ができない場合には、視力の低下に加え社会経済活動への参加が困難となり、罹患者本人だけでなく、中長期的には罹患者家族や社会経済にも負の影響を与えるものであり、火急の課題となっている。</p> <p>本プロジェクトはこれに対処する医療人材（網膜疾患指導医、同疾患を診断できる一般眼科医、診断と予防についての知識のあるパラ・メディカル）を育成し、複数の眼科病院が連携する網膜疾患診療サービス体制を構築するとともに、これらが自発的・継続的に強化されることを目標とするものである。</p> <p>実施団体である徳島大学は1980年代からネパールに対して眼科分野の支援を行ってきており、トリブバン大学とは連携にかかる協定も締結していることから、これまでの支援に継続し、本プロジェクト提案に至ったものである。</p>	
<p><b>1-2 協力内容</b></p> <p>(1) 上位目標</p> <p>ネパール国民が網膜疾患診療サービスを容易に利用できる。</p> <p>(2) プロジェクト目標</p> <p>ネパールにおける網膜疾患診療サービスが強化される。</p> <p>(3) アウトプット</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 網膜疾患治療技術が向上した医療従事者が増える。</li> <li>2. 網膜疾患診療センターが機能強化される。</li> <li>3. 網膜疾患診断を受診する人が増える。</li> </ol> <p>(4) 活動</p>	

- 1-1. ネパール人網膜疾患指導医 (MED) の養成
- 1-2. MEDが中心となり、網膜医療に関する研修を実施する。
  - 一般眼科医師研修
  - 内科医に対する網膜セミナー
  - 眼科助手研修
  - オプトメトリスト研修
  - 看護師研修
  - ヘルスワーカー (FCHV含む) 研修
- 1-3. 日本人講師による講演会・セミナーの実施
- 2-1. 新規の網膜疾患診療センターの開設
- 2-2. 既存の網膜疾患診療センターの強化
- 3-1. 網膜疾患スクリーニング・アイキャンプの実施
- 3-2. アイキャンプでの医療情報発信

## 2. 評価結果

妥当性 (Are these the right things to do?)

※DAC 評価 5 項目の妥当性に相当。

業務完了報告書の「妥当性」の項目も参照しつつ、評価の価値判断を行います。

現地のニーズ、実施団体のキャパシティ等から妥当性は非常に高いと判断する。

ネパールの失明原因のうち白内障の割合は 66.8% (1981 年) から 52.9% (2010 年) へ減少している (The Epidemiology of Blindness in Nepal:2012)。一方で、網膜疾患は増加傾向にあり、糖尿病の合併症として患った場合には、失明原因となる可能性がある。

網膜疾患の症状として視力悪化があるが、一度、その状況まで症状が進行すると回復が困難であり、同疾患においては早期発見、早期治療が重要となる。視力悪化に加え、失明原因となることから、社会経済に与える影響は大きく、また各ドナーの支援が感染症や、非感染症に集中する中、当該分野を支援する妥当性は高い。

実施団体である徳島大学は、1984 年に国立トリブバン大学眼科教授より要請を受け眼科医を派遣し、大学附属病院の開設に際し臨床指導および研究指導を行うとともに、アイキャンプにも参加しネパールでの僻地医療に協力した。また、2000 年には、アジア眼科医療協力会 (AOCA: Association for Ophthalmic Cooperation in Asia) からの要請によりネパール南部ゴールに建設されたゴール眼科病院に眼科医を定期的に多数派遣し技術指導を行うことで、同病院の独立運営を目指した。本事業のプロジェクトマネージャーは 2007 年より 3 年間、AOCA による草の根技術協力事業 (パートナー型) 「ネパールにおける眼科医療システム強化事業」に業務従事者として参加しており、技術指導を行った経験を有する。その後 2012 年には徳島大学とトリブバン大学は眼科分野および医学部間での協定を締結した。このように、徳島大学のネパールへの支援は歴史があり、現地の状況を十分に把握していること、ネットワークがあること等から、効率的な事業実施が可能である。

## 実績とプロセス (Are we doing what we said we would do?)

※DAC 評価 5 項目の効率性に加え、プロセス・マネジメントの適切性も検証。

業務完了報告書の「インパクト」の項目も参照しつつ、評価の価値判断を行います。

実績とプロセスについて、以下の点よりプロセス・マネジメントの適切性は高い。

ネパールでは眼科専門医が少なく網膜疾患の診断と治療が困難である。網膜疾患の症状として視力悪化があるが、その回復は困難であり、同疾患においては早期発見、早期治療が重要となる。医師に加え、医師とともに患者のファーストスクリーニングや診察を行う眼科助手等パラ・メディカルの育成も重要となり、当該事業で行った眼科助手向け研修参加者による患者発見の合計は、目標値 100 名に対し 405 名に上り、早期発見および早期治療に大きく貢献した。

また、白内障診断治療のための医師巡回（アイキャンプ）が一般的なネパールにおいて、網膜疾患に特化したアイキャンプがはじめて実施された。計 8 回に渡る網膜疾患アイキャンプにおいて 33 名の網膜疾患患者が診断されたことは、地方部で適切な診断、治療を受けることが困難な患者に対する先駆的なアプローチであった。目標値が 800 名に対し受診者数が 627 名に留まったが、地方住民に対して網膜疾患の脅威に対する理解促進を行ったことは、大きな役割を果たしたと言える。

国立トリブバン大学医学部眼科（以下 BPKLCOS）、ヒマラヤ眼科病院、ネパール眼科病院の 3 院では事業開始以前から既に内科的・外科的双方による網膜疾患治療を実施していたため、技術力の向上および機能強化を図った。特に BPKLCOS は網膜専門医のみならず科長や幹部医師からの全面的な支援があり、各種研修のシラバスや教材作成においてリーダーシップがあり、他の協力病院への影響力は大きなものであった。

C/P 機関の直営病院である小児眼科・耳鼻咽喉科・リハビリテーション病院では、内科的網膜疾患治療のみ実施されていたが、支援により外科的治療サービスが開始された。また R.M. ケディア眼科病院では当初予定において協力病院として想定していなかったものの、ネパール眼科病院の網膜専門医が異動したことをきっかけに独自予算を確保し、眼科助手やヘルスワーカーに対する研修が実施されたことは事業の成果といえる。

他方で C/P 機関との連携は難航した。ネパールでは一般的に現地 NGO が事業計画を申請し直営事業としてドナー機関等から資金供与を受けており、日本の実施団体が受託者となり現地 C/P 機関と共同で運営する草の根技術協力事業の実施形態は馴染みが薄く、事前に幹部の了承を得ていたにも関わらず実施段階になってから強い反発を受けた。2017 年 11 月に JICA 主管部／調達部による調査団を派遣し、在外事務所との現地中間評価により C/P 機関との共同実施が困難であることを確認し、直接的に協力病院へのアプローチを行う方針変更により上記成果を得た。問題発生後は即座に方向転換し成果を得たことを踏まえ、実施プロセスは適切であったと判断した。

#### 効果 (Are we making any difference?)

※DAC 評価 5 項目の有効性及びインパクトに相当。

業務完了報告書の「効果」の項目も参照しつつ、評価の価値判断を行います。

以下の点を踏まえ、事業における効果は非常に高いと判断する。

「妥当性」及び「実績とプロセス」に記載の通り、事業で実施した各パラ・メディカルへの網膜疾患診断技術の移転により技術が向上し、かつ早期発見を可能とした。

また BPKLCOS において、外科の専門課程が開設されたことで人材育成が継続的に行われ、プロジェクトマネージャーがトリブバン大学医学部客員教授として同課程に携わることから、人材育成はさらに向上することが期待される。

実施されたアイキャンプ等も患者の早期治療に大きく寄与した。また、早期発見後に詳細な診断や治療のため BPKLCOS ヒマラヤ眼科病院、小児眼科・耳鼻咽喉科・リハビリテーション病院、R. M. ケディア眼科病院を患者に紹介する水平的ネットワークを構築した。この紹介件数は当初目標値を大きく上回った。

#### 持続性 (How sustainable are the changes?)

※DAC 評価 5 項目の自立発展性に相当。

業務完了報告書の「持続性」の項目も参照しつつ、評価の価値判断を行います。

実施団体は長期に渡り現地への支援を続けており、今後もフォローアップを継続する予定であることから、今回構築した網膜疾患患者の早期発見と病院への紹介を行う体制は継続するものと思料する。

また、医師に加えパラ・メディカルへの技術移転を行ったこと、疾病の早期発見・早期治療の重要性が理解され、独自に予算確保を行う機関が出てきたことや、大学内で専門課程が開設されている状況から、持続性は高いと評価する。

### 3. 市民参加の観点からの実績

JICA が市民参加事業の意義として草の根技術協力事業へ求める「国民等の協力活動の助長促進」の観点から、本事業実施により貴団体を通じ得られた実績となる事項を記載します。

以下の点より判断し、当該事業による市民参加の観点からの実績は高いと判断する。

当該事業は実施団体にとってはじめての草の根技術協力事業であったが、支援型よりも規模が大きいパートナー型での 3 年間の事業を完了したことは、団体の運営能力強化に寄与したものと考えられる。

また、実施団体は医学部学生の単位認定のための短期研修先としてトリブバン大学医学部を指定しており学生の国際医療協力の理解推進に大きく貢献するものと勘案する。

また履行期間中の広報活動として新聞およびテレビにおいて本邦研修の様子が報じられ、地元

徳島への広報効果が大きく、全国レベルでも日本経済新聞紙上でプロジェクトマネージャーのインタビューが連載され注目を集めた。

この他、メディア登場は以下の通り。

- 2016. 9. 14 徳島新聞「ネパールの網膜症救え」
- 2016. 9. 25 読売新聞徳島版「ネパールで育て眼科医」
- 2018. 6. 25～2018. 6. 29  
日本経済新聞「途上国の患者に光を」インタビュー連載
- 2018. 8. 2 NHK 徳島放送局報道番組「とく6」本邦研修の様子を特集で紹介
- 2018. 8. 3 徳島で国際医療支援を考える会 A-TIMS での活動報告
- 2018. 8. 8 近畿大学医学部での活動報告
- 2018 年秋号 徳島大学広報「とく talk」プロジェクトマネージャーのインタビュー記事掲載

#### 4. グッドプラクティス、教訓、提言等

当該事業の向上、類似プロジェクトや草の根スキームの改善、関係者とのパートナーシップ構築等に向けたコメント、教訓、提言等を記載します。

実施団体はパートナー型実施における PDM の重要性をいち早く理解し、プロジェクト目標達成に向けての事業内容を把握するためマイルストーンとして、現地のステークホルダーだけでなく、国内拠点、在外事務所との情報共有に適切に活用していた。C/P 変更の際にも、PDM を踏まえ、その後の活動への影響有無を評価して対応した。PDCA を適切に運用したことから、事業終了時に於いて殆どの項目の目標を達成したものとする。

以上